

『つむぐ』

発行 教育相談室「あした塾」 発行責任者 滝井元之
連絡先 927-0014 石川県鳳珠郡穴水町梶りの197
☎・FAX 0768-56-1152 (自宅☎ 0768-56-1151)

穴水町の復興に向けて

神户大学名誉教授の室崎益輝先生が阪神淡路大震災30年のシンポジウムで語られたことから、いくつか取り上げてみます。
「復興の目標は何々。課題は何々」という話の中で、まずは「安全な所づくりをすることである」とい。課題は多くありますが、「周辺を切り捨てる行政を改めていく」「災害は社会の過ちを表に出していくから改革を進めていかねばいけない」と話しています。

そして「被災地と被災者が自立をする」ことを目指さなければならぬ、人間が希望を持っていくべきと...と話しています。その上で、どうしてメディア面ばかり注目されるか。穴水や能登のすばらしいところ、地域の光の部分を見つけて両方の議論(光と影)をしなければいけないとも話しています。



この声を受け止めて!!

「昨年1月1日の地震で家が倒壊した。1階の店が2階が落ちたことでつぶされ、何も持ち出せなかった。『生業』を失くし、これから生計はどれくらいか。何も気が付かない。天気も悪いとより気持ちが落ち込む...」(仮設を準備中を聞いた話です。ボクらの立場では、この話は聞くに堪えられません。でも、行政はなんとか支援を考えてください。相談のついでに。支援金をお願いしてください。

い。「生きている」ということは、そこ「命」があるということではありません。「生業」があり、「張り合い・やりがい・生きがい」があり、「元気で過ごせる」ということです。そして、「他力」のことであり、「他から必要とされている」ということです。住民被災者に寄りそ行政であってほしいと思います。" いちかた。ではなく文章の"寄りそ"です。(T)

(「つむぐ」第89号は4月1日付で発行予定です)

相談・情報は教育相談室「あした塾」までお寄せください。(関係等は掲載下にあります。)

映画

七人の侍

監督 黒澤明



(1997年 さとう たけお さんの 劇画「七人の侍」より引用)

「七人の侍」主演は三船敏郎・志村喬。一九六〇年に西部劇「荒野の七人」としてリメイクされています。

30年前の阪神淡路大震災がボランティア元年と言われ、その後の災害ボランティアが続き続けています。このボランティアに関し、興味深い語を紹介し、今から71年前の昭和29年(1954年)に日本が世界に誇る映画監督黒澤明氏が「七人の侍」という映画を世に出しています。戦国時代、戦乱の中で野武士が登場することになり、その野武士がギリギリの中で必死に生きている農民の集落を襲います。農民は自分たちと集落を守るために「侍」を雇うことにします。この農民の求めに応じた「七人」はまさに究極のボランティアとも言えます。命懸けで戦い、父名が命を落としていきます。



中央公論社

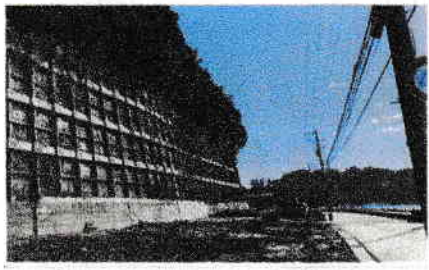
示唆に富む内容

「七人の侍」は全くの無報酬で農民のために戦うのです。自分たちだけで戦うのではないです。農民を組織し、侍と農民と一緒に戦うのです。このことは大きな教訓です。おのれ、右上の短くあるように、黒澤監督は侍大将の島田勘次衛に「他人を守ってこそ自分も守れる!! おのれの事はかき考える奴は おのれをむす奴だ!!」というセリフを言わせています。つまり、黒澤監督は只者ではなく、大志者なのです。

(中央公論社から発行された「さとう たけおさんの劇画「七人の侍」」の表紙)

求められるこれからの大志者

あの地震から1年2ヶ月。県外から来る人には復興が何と進んでいないように見えるようです。残念ですが、これが現実です。そんな中、皆さんが自立できるように、小さな一歩一歩を進めるしかありません。このボランティアは、その自立を支援する(後押しする)ものでなければなりません。与える支援から「引き出す支援」に。支援物資も必要、傾聴も必要、イベントも必要。でも、自立後押しする支援がもっと必要です。



(解体された古い住宅街)